

ひょうごの遺跡

平成8年11月11日発行
兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所
神戸市兵庫区荒田町2-1-5
☎652 TEL 078-531-7011
FAX 078-531-7014

平成8年度 復興調査特集



阪神・淡路大震災の復旧・復興にかかる埋蔵文化財の発掘調査が、2年目に入りました。支援職員を中心としたメンバーは、本格化した土地区画整理事業や住宅建設にあわせ、今年度も神戸市をはじめ、芦屋市などの阪神間各市の発掘現場で奮闘中です。

今回は、こうした支援職員の皆さんが、慣れない土地で行っている震災関連の発掘調査の特集をお届けします。なお、復旧・復興事業に伴ってこれからも発掘調査は継続されると思います。重ねて、地元の皆さんにご理解とご協力いただければ幸いです。



明石城櫓跡の発掘調査状況

むこのしょう

武庫庄遺跡 第36次調査（尼崎市武庫之荘）

調査担当（千葉県Aさん・岐阜県Bさん）

武庫庄遺跡は阪急武庫之荘駅の北側1kmに位置し、弥生時代中期を中心とする遺跡です。武庫之荘本町一帯は、古くから弥生土器や石器などの遺物が採取できる「遺物散布地」として知られていました。その後、武庫庄遺跡と名付けられ、これまでに35回の発掘調査が行われています。

今回の発掘調査は、震災復興に伴う共同住宅建設に先立って、尼崎市が国庫補助事業により行うもので、当事務所の復興調査班が支援しました。調査面積は、建物部分にあたる約600㎡です。

その結果、弥生時代中期の大型柱列、掘立柱建物跡、^{ほったてばしらたて}掘立柱建物跡、^{たてあなじゅうきょ}掘立柱建物跡と平安時代の掘立柱建物跡などを発見しました。特に、大型柱列は柱根（根元）が残っており、弥生時代最大の掘立柱建物跡の可能性も出てきた大規模なもので、弥生時代中期のムラを考える上で大変貴重な成果を得ることができました。

以下、その概要について紹介しましょう。

大型柱列は、調査区の南東端に確認できました。下の写真は、それを南から写したものです。南北方向に平行して2列、柱列の間隔は8.6mあります。柱穴は幅1.3mの溝の中に、1.4m×0.9mの長方形のものを東側に3本、西側に5本とそれぞれ2.4m間隔で掘られています。さらに、柱穴は北側に続いて



柱根の取り上げ状況

いるようです。柱穴内にはヒノキの柱材の根元が残っており、直径50cm、長さ64cmのものもありました。また、南側の2本の柱穴を結んだ線のほぼ中心から4.5m南の位置に、直径77cm、長さ86cmの柱根を発見しました。上の写真は、この柱根を取り上げたところです。柱は1.7m×4.8mの溝の北端に、一辺1.7mの隅丸方形をした穴を掘り、据えていました。溝は柱の掘り方（穴）に向かって傾斜しており、大きな柱を据えるために斜めに掘り込まれたものと推測されます。これを柱の規模や位置から、柱列と関連する遺構と考え、2列の柱列は建物の^{けた}桁（柱の上方にあり^{たるき}垂木を受ける横木）を支える柱、南端の大きな柱は建物の棟木（^{むなぎ}屋根の相交わる部分を受ける材）を支える棟持柱と捉えれば建物跡となるのです。柱列の間隔が、^{はり}梁の長さに相当します。



大型柱列の調査状況

近年、池上曾根遺跡（大阪府）や伊勢遺跡（滋賀県）でこのような大型の掘立柱建物跡を見つけていますが、これが建物跡ならば梁の長さだけでみても6.9mの池上曾根遺跡をはるかに上回る大きさなのです。なお、柱穴が調査区外に延びることから全体の規模など不明なことも多いため、名称は大型柱列としています。

他に、同時代の遺構としては、調査区の北側で発見した掘立柱建物跡や円形の竪穴住居跡があります。下の左写真が、これを南から撮影したものです。中央の円形に巡る溝が竪穴住居跡、その左が1号掘立柱建物跡、右が3号掘立柱建物跡です。竪穴住居跡と3号掘立柱建物跡の間には溝状遺構が延びています。

1号掘立柱建物跡は、調査区の北西隅に確認した建物です。柱を据えるために直径0.7～1.2mの円形もしくは隅丸方形の穴を掘り、中に直径15～20cmの丸木柱を立てたものです。柱穴は全部で6本発見し、南側に並ぶ3本の柱穴が短辺（はりゆき）で4.8mあり、長辺（けたゆき）が4.8m以上あります。南側の3つの柱穴のうち、両端の柱穴が深く掘られているのは、建物のコーナーの柱をしっかりと固定するための工夫と考えられます。

3号掘立柱建物跡は、調査区の北端に見つけた建物です。柱を据えるための穴は、直径0.6～1.0mの楕円形もしくは隅丸長方形に掘っています。柱は穴内の埋土の痕跡から、直径30cm前後の丸木柱と推定されます。建物の短辺は5mですが、長辺の柱間は一定の長さでなく、中央の柱と東側の柱の間が広く2.7mあり、西側の柱との間は1.8mと狭くなっています。また、中央と東側の4本の柱穴には柱根が残っていましたが、西側の2本の柱は抜き取られていました。これらのことから、中央及び東側の柱と西側の柱は機能が異なっているものと思われます。

円形竪穴住居跡は、幅約15cm、深さ約5cmの溝が



円形竪穴住居跡と掘立柱建物跡

直径7.3mの円を描くように巡っているものです。溝の内側が床になるのですが、一部途切れ、名称のような竪穴になっていないのは、田畑の造成や耕作などのため床面まで削り取られているからなのです。屋根を支えるための柱は、溝から約80cm内側に4本見つけました。また、住居内の中央と南側に土坑を持っています。

溝状遺構は、調査区の中央を北から南に一直線に延びる形で約35m分を発見しました。この方位は、大型柱列と同じ向きになっています。幅は約30cm、深さは約15cmを測ります。断面形態が箱形を呈し、一部に幅10cmの黒色土の堆積が認められることから板塀の跡とも考えられます。

以上の遺構は、全てが同時に存在したものではなく、出土した土器と遺構の切り合いや方向性から、3時期に分けられそうです。遺構相互の関係は、現時点では古い順に下記のように推定しています。

- 1期 …… 円形竪穴住居
- 2期 …… 大型柱列、溝状遺構
- 3期 …… 1号・3号掘立柱建物

次に、平安時代では調査区の南西部に、真南を向くように建てられた東西に長い建物跡があります。南北に5列の柱穴群が見つかり、北から2列目と4列目の柱穴が深く掘られていました。このことから、梁行2間×桁行5間の、北と南に底を持った建物と推測できるのです。

今回の発掘調査では、弥生時代中期の掘立柱建物とともに、他に例を見ない太い柱を並べた大型柱列の発見は、調査地点及びその周辺がムラの中でも特別な場所であったことを想定させます。しかし、弥生時代の遺構の大半が調査区外へ延びる状況では、建物の規格と配置やその性格について、十分な検討をすることができません。今後は、周辺の調査や他遺跡の資料との比較などを通し、弥生時代の武庫庄遺跡の実態を復元したいと考えています。



現地説明会風景

まるづか 丸塚遺跡 (神戸市西区玉津町)

調査担当 (山口県Cさん・兵庫県Dさん)

丸塚遺跡は神戸市の西部、玉津町丸塚に所在する弥生時代から中世にかけての集落遺跡です。今回、神戸市都市整備公社が行う区画整理事業に先立って、5月から8月にかけて発掘調査を実施しました。調査面積は、約1,500㎡です。

遺跡のある丸塚地区は、明石川と^{はげたに}櫛谷川の合流点に近く、河川による土砂堆積によってできた地形です。現在は平地になっていますが、遺跡のあった弥生時代はそうではなかったようです。

発見したのは、弥生時代の竪穴住居跡・溝・土坑と室町時代の掘立柱建物跡などです。

竪穴住居跡は円形のものが2棟、隅丸方形ないし方形のものが5棟あります。年代は、弥生時代中期末～後期末のものです。出土した遺物と住居の重なり具合から、平面形態の円形のものが古く、次第に方形に移り変わっていく様子がよくわかりました。新しい時期の住居には、周りに溝を巡らすものがあります。おそらく、雨水から住居を守るために作られたものでしょう。また、住居内から屋外へトンネ

ル状に排水溝を設けていたものもあり、当時の人々がいかに排水対策を行っていたかを知る興味深い資料となっています。

なお、これらの住居が建っている場所は調査の結果、微高地(自然堤防)上であることが明らかになり、微高地と微高地の間には^{こうはいしち}後背湿地と呼ばれる低地や埋没河道も認められました。弥生時代の集落が存在した頃には、微高地と後背湿地が広がる微妙な起伏の地形環境であったと捉えられる訳です。そして、中世の段階頃に後背湿地の埋没が完了し、概ね平坦化したと考えられます。遺跡では、15～16世紀の掘立柱建物跡や溝跡が見つっています。



掘りあげた遺構群

なりひら 業平遺跡 第26地点(芦屋市業平町)

調査担当 (鹿児島県Eさん・佐賀県Fさん)

業平遺跡第26地点はJR芦屋駅から南西140mの市街地に位置し、芦屋川左岸の標高が14mの段丘南端部に立地しています。

被災のあった住宅地に5階建の共同住宅が建設されることから、これに先立って確認調査を実施した結果、遺跡の存在が明らかになりました。6月25日から8月5日までの全面調査は、芦屋市教育委員会が当事務所の復興調査班の支援を得て行ったものです。

調査では、大きく3つの時代の遺構と遺物を発見しています。

最も新しい時期のものは、古代から中世にかけての鋤を使用した溝の跡で、東西方向に何条も延びていました。この遺構からは、当時調査地一帯が鋤で耕され、水田や畑として利用されていたことがわかりました。

次に、この溝の下の地層から、古墳時代後期(約1,400年前)の竪穴住居跡が2棟見つかりました。住居跡内からは須恵器の蓋杯・平瓶のほかに、土師器

の高杯・甑の把手などが出土しています。また、釣鐘形をした飯蛸壺と^{いいたこつぼ}両端に孔のあいた棒状の網の錘^{おもり}がまとまって見つかったことから、漁業も行っていたことがわかりました。

さらに、同一面から弥生時代前期(約2,200年前)頃の遺構も発見しています。遺構は、長径約1mの楕円形をした土坑が9基です。それぞれの土坑内からは、壺や甕が出土しました。

土坑は人を葬った墓の可能性が高いのですが、人骨が残っていないため現段階では明らかではありません。貯蔵穴なのかもしれません。今後、検討しなければならない課題です。



発掘調査風景

ありおかじょう い たみごうちょう
有岡城・伊丹郷町遺跡 (伊丹市伊丹)

調査担当(滋賀県Gさん・青森県Hさん)

有岡城・伊丹郷町遺跡は伊丹市の東部、JR伊丹駅付近から西側一帯に位置しています。遺跡のうち、有岡城主郭の西側部分は昭和63年5月に国の史跡に指定されました。

有岡城は天正2年(1574)に荒木村重が入城した際に、伊丹城から改名したと言われています。次いで、侍屋敷や町家などを惣構内に取り込んで伊丹台地一帯を城域とする広大なものに改築したのですが、天正11年に廃城の憂目にあいました。その後、残された町家を中心に酒造業によって江戸時代全般にわたり繁栄したのが伊丹郷町です。

遺跡は本年9月までに182次にわたる調査が行われ、今年度、当事務所が実施した調査もすでに5箇所を数えます。このうち、181次と182次の調査で有岡城の時期に遡る遺構を発見しています。有岡城の要衝のひとつ、岸の砦(現猪名野神社)の南側で行われた181次調査では幅5.1m、深さ2.9mの堀跡が、182次調査では根石をもつ掘立柱建物、土坑などがあります。これらの遺構からはカワラケ、国産陶器、



堀跡と埋土の状況

明代の染付、渡来銭などが出土しました。

伊丹郷町時代の遺構は、全ての調査地点で見つかっています。溝、井戸、桶や甕を用いた便所、土坑(ゴミ穴)など、そしてそれとともに出土する多量の陶磁器に当時の旺盛な人々の生活を偲ぶことができます。また、酒米を蒸すために使用されたとみられる竈など生業に関わる遺構も発見されており、町の繁栄振りを彷彿させます。

有岡城の城域は、自然の台地そのものを利用していため、都市化が進む中にもその輪郭を今でも見ることができます。調査のもたらす成果で有岡城・伊丹郷町遺跡の様相がより明らかになり、歴史が益々身近に再現されることを期待しています。

あかしじょう
明石城跡 (明石市明石公園)

調査担当(奈良県Iさん・島根県Jさん・兵庫県Kさん)

明石城は、元和年間(1619年～)に小笠原忠真によって築かれた近世城郭です。現在は県立図書館や植物園、色々なスポーツ施設を持つ公園として、県民に親しまれる場所となっています。

ここでも、震災のための石垣修復事業に先立って発掘調査を行いました。今年度は石垣解体時の裏込め状況と、国の重要文化財に指定されている櫓の基礎部分の調査を実施しています。

異櫓の調査では、現在の櫓の基礎部分を掘り下げたところ、全域に焼土と炭が広がる被災面を発見しました。焼土面には、礎石を据えるための掘り方も見つけています。また、礎石上面には柱の痕跡も確認できました。ただし、柱の通りが完全でないことから、礎石は動かされているかもしれません。年代についても、掘り方内から瓦片が出土しているものの、時期決定までは難しそうです。さらに、焼土面の下層では土坑を見つけました。大きさは、1.2m×0.9mの長方形の形態です。中からは鉾滓と鉾滓の付着した陶磁器が出土しています。



現地説明会風景

坤櫓の方は明治期の大修理で基礎構造も変わり、遺構面も攪乱を受けていました。出土遺物も、近世末から近代のものが混じっています。注目されるものには、文化年間以降に明石で活躍した人の名前を記した木札があります。また、礎石は異櫓よりも大きいものが使用され、大半の裏面には墨書がありました。

6月23日には、櫓修復工事の一般公開とあわせて櫓跡の発掘調査状況も見学していただきました。当日は、約3,700人もの方々がお見えになっています。うれしいことです。

みなみほんまち

南本町遺跡 (伊丹市南町)

調査担当 (岐阜県Lさん・兵庫県Mさん)

南本町遺跡は伊丹市の南部域、尼崎市との市境に近い南町から南本町にかけて広がる遺跡です。今回、調査を行ったのは県営伊丹南町住宅の西側、道路をはさんだ向かいの地点です。平成7年度にも、この東側で発掘調査を実施しており、古墳1基、奈良時代の溝跡や掘立柱建物跡、それに中世の濠跡などを発見しています。

調査は尼崎港川西線（通称産業道路）の拡幅工事に伴って実施したものです。調査面積は約1,500㎡で、5月中旬から開始し、8月の中旬に終了しました。新たに発見した遺構は、掘立柱建物跡群、井戸跡、溝跡と土坑などです。これら大半の遺構の年代は、出土した遺物（須恵器・土師器・瓦など）から判断すると奈良時代（8世紀）と考えられます。

掘立柱建物跡は、7棟を確認しました。それらは規則性をもって建てられており、主軸がほぼ東西または南北方位に沿って並ぶ一群と、南北方位に対してやや西を向く一群の2グループに分けることができます。中でも、特に注目されるのが、最も遺構の密集する地区で発見した大型の建物跡です。この建物跡は梁行2間、桁行5間の6m×12mの大きさになります。柱を据えるために掘った穴も、直径1m前後の大きなものでした。柱そのものは全く残っていませんでしたが、柱穴断面の土層を観察したところ、使われていた柱の直径は30～40cmくらいだったことが明らかになりました。また、建物の周囲には幅20～80cmの溝が巡っていました。これも、他の建物には存在しない特徴です。



大型掘立柱建物跡

次いで、注目できる遺構として井戸跡を紹介します。井戸の掘り方（穴）は方形で、深さは約2.5mあります。最下部の水溜（みずため）には、直径70cm、高さ56cmの



井戸跡の調査状況

まげもの曲物を据え、その上に長さ約1.3mの板を井戸枠として井籠組に積み上げ、下から4段目までが残っていました。井戸内から須恵器・土師器・瓦・斎串（いぐし）などが出土しており、須恵器の底部外面には「中井□」と墨書されたものが1点ありました。残念ながら、底の一部が欠け、3文字目がはっきり読めないため、この墨書が何を意味しているのかわかりません。

遺跡は、建物群が規則的に配置されていること、大型の建物が見られることなどから、単なる一般の集落とは考えられません。そこで、周辺に目を向けると、当遺跡の東方約500mに位置する尼崎市猪名寺廃寺の存在が注意されます。

この寺は白鳳時代（はくほう）に創建され、法隆寺式の伽藍配置を持っていたことが明らかになっています。遺跡の性格を考えるにあたっては、この猪名寺廃寺との関連を重視すべきだと思います。と言うのも、今回の調査で、猪名寺廃寺に出土したものと同じと見られる瓦を少量ながら発見しているからです。

このように南本町遺跡は、猪名寺廃寺と何らかの関係がある遺跡と捉えて間違いないでしょう。例えば、猪名寺廃寺を創建したとされる当地の豪族「猪名氏」の拠点的な集落と考えることができるかも知れません。



井戸跡から出土した墨書土器

復興調査と支援職員

兵庫県教育委員会には、震災復興に伴う発掘調査を支援するため、北は青森県から南は鹿児島県の1都2府32県3政令指定都市から、50名の埋蔵文化財専門職員の皆さんが来県されています。年齢、経験そして出身地も異なる方々が、復旧・復興事業の妨げにならないように、与えられた期間のなかで調査を終えようと日夜努力されているのです。同じ埋蔵文化財行政に携わるものとして、ただただ頭が下がります。

年度も半ばを越え、復旧・復興事業の裏方として活躍中でしたが、9月末をもって派遣元へ帰任された方が7名おられます。この人達に、支援の思い出を語っていただきましたので掲載します。

七人の侍のはなし

◎半年たった率直な感想は、あっという間に過ぎてしまったということだった。短い期間の派遣でとても復興の役に立ったとは思えないが、個人的には貴重な経験となった。最後に一刻も早い復興を心より願っています。
(千葉市 白根さん)

◎兵庫の遺跡を調査して思い出に残っているのは、伊丹の近世遺構があげられます。というのも派遣元の肥前陶磁器が多く出土したので遺物についての知識が少しあったためです。これだけの支援職員が全国から来ると「文殊の知恵」でいろんな事ができるのではと思います。
(長崎県 川口さん)



支援職員調査風景

◎調査現場の周辺で更地に次々と住宅・店舗の建設が進む中で、復興の進捗が肌で感じられ、ささやかではあるが、復興支援に参加できたことを喜びとしたい……。
(広島市 石田さん)

◎いいフンイキで調査できました。再三にわたり見学者があり、地元・入居予定者の関心の深さが知れました。
(和歌山県 辻林さん)

◎慣れない土地なので不安がありましたが、県や市の方々のご助力により、安心して調査を進めることができました。神戸という土地にもやっと慣れたところで戻るのは、少し残念なところもあります。
(仙台市 渡部さん)



支援職員調査風景

◎まともに発掘調査ができるのだろうか。復興支援にいくことに一抹の不安はあった。しかし、少しずつではあるが、確かな足取りで復興しているのを感じた。今後の正念場も、無事乗り越えてほしいと願っている……。
(和歌山県 富加見さん)

◎当初、兵庫の調査体制あるいは他県の調査体制を知り、長所・短所を把握しようなどと考えていましたが、状況が状況ですから、変な話かもしれませんが与えられた仕事をとにかくこなそうと考えました。ただ、それがうまくいったかどうかはわかりません。
(宮城県 山田さん)

**支援職員の交流で
互いの視野広がる**

復興へ発掘急ぐ

早期復興へ
家屋再建に伴う遺跡調査
慎重に……速やかに

国県教委 全国から49人応援

埋蔵文化財調査「待ったなし」

県教委 復興事業控え本格化
各新聞記事から抜粋

お知らせ

わたしたちの仕事のひとつに、普及活動としての**展示会**の開催があります。

今年度は、兵庫県民会館「ふるさと資料室」と加東郡社町の県立教育研修所「玄関ホール」を使用し、兵庫県文化協会と教育研修所との共催という形で企画展を実施しています。

テーマは右に掲げた『災害と考古学—地震跡を掘る—』と、『播磨の遺跡—古墳時代の生と死—』です。

どちらも、平成8年度末まで行っておりますので、近くにお寄りの時にはぜひご覧下さい。小さな展示会ですが、内容は豊富です。



支援職員の異動

〈9月30日付 離任者〉

都府県市名	氏 名
宮 城 県	山田 晃弘
和 歌 山 県	辻林 浩
	富加見泰彦
長 崎 県	川口 洋平
仙 台 市	渡部 紀
千 葉 市	白根 義久
広 島 市	石田 彰紀

〈10月1日付 転入者〉

都府県市名	氏 名
宮 城 県	菊地 逸夫
和 歌 山 県	吉田 宣夫
	武内 雅人
長 崎 県	町田 利幸
大 分 県	友岡 信彦
仙 台 市	金森 安孝
広 島 市	若島 一則

都府県市名	氏 名
福 岡 市	中村啓太郎

この度、左記の支援職員の方々が異動されました。離任された7名の方には感謝申し上げるとともに、新任の8名の方のご健康とご活躍をお祈りします。



編集後記

◇23号は復興調査の特集でした。編集しながら深まりゆく秋のなかに、ふるさとを懐かしく思い出しています。
 ◇支援職員の皆さんも、もちろん我々職員も元気です。
 ◇復興とともに、街も生まれ変わっています。みんなで歴史を生かした街、新しい故郷をつくりたいものです。 (S・O)